論文

石垣原合戦の亡霊伝承をめぐって
– 開発にともない創出される人神 –

福　西　大　輔

１、はじめに

大分県別府市にあるルミエールの丘には、石垣原合戦の落ち武者や武士の霊（以下、石垣原合戦の亡霊とする）が出るという噂がある。それらの噂はインターネット上を中心に広がり、若者たちにルミエールの丘は心霊スポットとして知られるようになった[(1)]。しかし、調べてみると石垣原合戦の亡霊やそれに準ずる存在が出たとされる場所は別府市内に数か所あった。その背景にはどのようなものがあるのか考えていきたい。

これまで石垣原合戦の亡霊のような話は、口承文芸研究の中で取り扱われることはあっても民間信仰や供養との関りの中ではあまり論じられてこなかった。人を神に祀る習俗、いわゆる人神信仰として、こうしたものを位置づけ、本論では検討してみる。

人神信仰の研究は柳田國男の頃からはじまる。柳田は「死者を神として祀る慣行は、確かに今よりも昔の方が盛んであつた。（中略）弘く公共の祭を享け、祈願を聴容した社の神々の、人を祀るものと信ぜられる場合には、以前には特に幾つかの条件があつた。即ち年老いて自然の終りを遂げた人は、先づ第一に之にあづからなかった。遺念余執といふものが、死後に於てもなほ想像せられ、従って屡々タタリと称する方式を以て、怒や喜の強い情を表示し得た人が、このあらたかな神として祀られることになるのであった」と記している。人が神として祀られる上で重要な点として祟りの発動を上げている。小松和彦は人が神になる道には大きく２つあるという（小松 2006 p45 ～ 50）。一つは変死・非業な死・無残な死をとげ、祟りが発生し怨霊になったとされたものが供養され、御霊信仰として祀られたものである。もう一つは生前偉大な功績を残し、死後も尊敬の対象となり、顕彰神として祀られるものである。その上で小松は、御霊信仰は中世的なものであり、顕彰神は近世的なものとした。それ以後も多くの研究者によって、人神信仰は研究されてきた。

こうしたことをふまえ、まず石垣原合戦と、それに関連する寺社などを見ていく。

２、石垣原合戦と、それに関連する寺社・供養碑

別府市で石垣原合戦の亡霊が出るとされる場所は、石垣原合戦の跡地を中心に広がっている。石垣原合戦は「九州の関ヶ原」といわれている[(2)]。立石村と呼ばれた場所の周辺が舞台となっ

ている。

慶長5年（1600）、黒田如水（官兵衛）と大友義統の両軍は3日間で計7度にわたり激闘を演じ、両軍の死者は黒田方370余人、大友方200余人も出て、七ツ石付近の原野は血に染まったと語り継がれている。

この戦いは、木付城（杵築城）の攻略に失敗した大友軍が、立石に本陣を置き、右翼に吉弘統幸、左翼に宗像掃部の陣を並べ鶴翼の陣を取り、黒田軍に立ち向かおうとしたことからはじまる。黒田軍は細川忠興の家臣らとともに実相寺山南側中腹に布陣した。

黒田軍は大友軍の陣のある立石際まで攻め込んだが、大友軍に反撃され、黒田軍の有力武将が討死した。黒田軍の先鋒は総崩れとなり、実相寺山と加来殿山の間まで撤退し、大友軍の武将・吉弘統幸は逃げる黒田軍を追いかけて、実相寺山の麓まで迫ったといわれている。この戦況を加来殿山で見ていた黒田軍大将・井上九郎衛門は戦闘で疲れの見える大友軍に攻めかかり、形成は逆転し、吉弘統幸ら大友軍の有力武将は討死し、黒田軍の勝利となった。大友義統は降伏し、海雲寺で剃髪した。それにともない豊後の地を22代、約400年支配していた大友氏はその座を退いた。

この戦いで死んだ兵士たちを祀る寺社や供養碑などが別府市内に点在している。その主だったものを見ていくと、以下のようなものである[(3)]。

①　吉弘神社（吉弘統幸）　別府市石垣西6-6-19

石垣小学校の南西約100mに吉弘神社は鎮座している。大友氏の忠臣・吉弘統幸が死後、太平山・宝泉寺（臨済宗）の住職や地元の人たちの手によって、この地に祀られたのがはじまりである。吉弘統幸は、戦いの前夜に「明日は誰が草の屍や照らすらん石垣原の今日の月影」という辞世の句を残したといわれ、死を覚悟して、石垣原合戦に挑んだとされている。

寛永9年（1632）頃、吉弘統幸の忠義に感銘を受けた、石垣原合戦では敵であった細川家によって石祠が建てられ、一株の松を墓の側に植えられた。その松周辺は名所として知られるようになり、旅人や参勤交代の諸侯も下馬して参詣したことから、「下馬の松」と長い間、呼ばれ愛されていた。ところが、明治初年に何者かによってその松は伐採されてしまう。

大正10年（1921）になると、吉弘統幸の子孫・吉弘重義らが政府の許可を得て、翌年の大正11年（1922）に墓所の前に本殿と拝殿を造った。そして、松も植えられ2代目の「下馬の松」として知られるようになる。それが現在の吉弘神社（別府市石垣原西6丁目）となった。かつては祠に詣でると、猛将の威力で難病も平癒するといわれ、参拝が絶えなかったという。

祭祀は1月1日の元旦祭、4月8日の春の大祭、9月13日の秋の大祭（吉弘統幸の命日）に行われている。平成2年（1990）には「三百九十年祭」が開催され、吉弘家がはじめさせたと

いう、国東市に残る吉弘楽の奉納も行われた。平成 13 年（2001）には拝殿の改築工事が行われ、平成 29 年（2017）には祠が新しく造り直された。

②　宝泉寺（吉弘統幸）　別府市石垣西 3-8-34

宝泉寺は、別府鶴見丘高校から別府湾にむかったところにある。現在も吉弘統幸の位牌を寺に安置し、その菩提を弔っており、吉弘神社の前身となった吉弘統幸の墓を造るのにも大きく関わっていた。この寺の門前には「吉弘公菩提寺」という石碑が建てられ、吉弘統幸には「統雲院殿 傑勝運英 大居士」という戒名がおくられている。

宝泉寺は、山号は太平山、臨済宗妙心寺派の寺院である。元々は承安 3 年（1173）、法慈法師の創建で、当時は天台宗石雲山宝泉寺と呼ばれていた。その後、しばらく荒れていたが、至徳 2 年（1385）に 11 代大友親著が再建した。

石垣原合戦においては兵火に罹り建物を失い、久留島藩主の建物を以て堂宇に充てた。寛文 5 年（1625）、石垣村中石垣屋田直政家出身の萬寿寺住職乾叟禅師が再興し、山号を太平山と改めた。その後、老朽化のため、昭和 2 年（1927）に現在の本堂が再建された。本尊は釈迦如来で、両脇に文殊菩薩・普賢菩薩を祀っている。

明治 32 年（1899）には吉弘統幸の 300 回忌をこの寺では行っている。吉弘統幸の肖像画が残されている。

③　本村天満宮（宗像掃部）　別府市南立石本町 1356

観海寺にある杉の井ホテル北側の駐車場から道沿いに進んだ、大友義統本陣跡の西側に本村天満宮はある。ここに宗像掃部が祀られている。宗像掃部は、大友氏の旧臣で主家改易後、岡城主の中川秀成のもとに属していた。大友義統が旧領回復を目指し別府の地へ上陸すると、同じく中川氏に属していた田原紹忍と共に駆けつけ、大友軍の左翼に布陣した。大友軍の主力として戦い、激戦の中で討死したと伝えられている。

その宗像掃部の墓は本村天満宮の境内にある五輪塔だとされている。五輪塔の手前には昭和 47 年（1972）7 月に建立された「宗像之神」の扁額がある鳥居がある。こうしたことからこの神社では宗像掃部が人神として祀られていることが分かる。そして、平成 23 年（2011）には「宗像掃部鎮続公御遷座記念碑」というものが建てられた。その碑によれば、宗像掃部は御堂の原（現在：別府市堀田）で祀られていたが、明治になり荒金氏邸宅（南立石本町）に移されて、後に現在地である本村天満宮で祀られるようになったという。

この神社の祭神は厳密にいえば菅原道真であり、宗像掃部は祭神ではない。郡村誌によれば明

暦５年（1657）とあるが、由緒書きには、文明４年（1472）に足利義政の命で右京太夫従四位下臣勝元が京都北野天満宮の分霊を奉戴し、上野国義によって現在地に勧請となっている。だが、地元の人々には宗像掃部の神社として認識されている。天満天神宮拝殿の天井には、色鮮やかな石垣原合戦を元にした天井画があり、この神社で行われる大友本陣の慰霊祭や天満神社の行事の時に一般公開されていた。

また、この神社では旧暦10月25日には、藁12束を若者が振り回した後、神木に七巻半巻きつけるというスボフリ祭が戦前まで行われていたという。このような祭りは熊本市内でも天神を祀る神社などで行われており、天神信仰との関連の中で行われてきた行事だと推察できる[4]。

④　手足荒神（黒田家の家臣）　別府市南立石１区

観海寺にある杉の井ホテル北側の駐車場から道路を隔てて、民家が並ぶ場所の中に手足荒神がある。この手足荒神には以下のような伝承が伝わっている。石垣原合戦の前夜、黒田方偵察役の侍が崖を降りる時に足を踏み外して手足を骨折し、大友方の不寝番の侍に捕らえられてしまった。捕らえられた武士は、「自分の首をとって手柄にせよ、自分は死して百代の世まで手足を挫いたものを護るであろう」と言い残して斬首された。それを聞いた吉弘統幸は、これを憐れみ、河原端に手厚く埋葬した。その後、手足を負傷した武士たちがここを参詣すると不思議と治癒することが続いた。近隣に住む佐藤家の先祖によって、現在の位置に祠が造られ、手足荒神として受け継がれていくようになったという。

現在も病の状況や治してもらいたい部分を記した紙やそこを模った手形や足形の奉納、松葉杖などが奉納されている。

⑤　石垣原合戦戦死者供養塔（大友義統本陣跡）　別府市南立石本町1343

杉乃井ホテル前の道路を約１・２キロ山手北西方面に進んだところに石垣原合戦戦死者供養塔がある。平成元年（1989）に古屋勝馬氏の手によって、戦死者供養のための五輪塔がつくられた。古屋家には「石垣原合戦日記」という文書が伝わっており、碑を建てた勝馬は36代目の当主であった。古屋家は立石天満宮の神職と立石村の庄屋を代々世襲している家であった。

また、傍には「石垣原古戦場」と「大友義統本陣跡（古屋園）」と刻まれた石碑やそれに関する解説が別府市役所によって建てられており、この地は大友義統本陣跡として、広く人々に認識されてきた。

⑥　旧実相寺（黒田如水陣所跡）

実相寺は、かつては実相寺山のふもとにあった。伝承によれば、天平勝宝３年（751）に僧・明賢が速見郡河直山の下に一宇を建立し、その師・仁聞法師を鼻祖とした。

ところが、実相寺は石垣原合戦で黒田如水の陣所となり、合戦終了後、黒田軍・細川軍の救護所及び死体の安置所とされ、血で汚れたため、寺ごと焼き払われたといわれている。その後、実相寺山より北西側約 1･2km 離れた、県道 218 号線沿いに再建された。宝暦（1751-1764）の初め、肥前佐賀の僧・即現が復興したといわれ、天和２年（1682）に玖珠の安楽寺７世の茂林禅師を請うて、改めて開山したとしている。現在の本尊は観音菩薩像となっている。石垣原合戦とは関連が深い寺だが、現在は直接的な繋がりが少ない。

⑦　海雲寺（大友義統剃髪の寺）　別府市南立石本町 1314-1

大平山・海雲寺（曹洞宗）は、鶴見岳の東側中腹にある。黒田如水に負けた大友宗麟の嫡男・大友義統がこの寺で剃髪し、黒田軍へ投降したといわれている。

海雲寺はかつて鶴見岳の麓、恵下というところにあったといい、その時代に大友義統がこの寺で出家したとされている。1608 年の貞観の大地震の折、鶴見岳の噴火によって、海雲寺は崩壊滅寺し、1630 年で再興したという。移転したということもあり、この寺も石垣原合戦と歴史的には関連が深いが、現在は直接的な繋がりは少ない。

このように石垣原合戦のあった場所、明治 22 年に出来た旧石垣村を中心に寺社や供養碑などが点在している。まず、敗軍であった大友関連のものを見ていくと、名のある人神として祀られ

ているのは、吉弘統幸と宗像掃部だけである。総大将であった大友義統のゆかりの寺はあるが、彼を祀り、供養する寺社は別府市内にない。義統は出家し斬首を逃れ、流刑になったこと、そして、キリシタンだったという話が大きく影響していると考える。

それ以外で戦死した個人を祀っているものとしては手足荒神もある。こちらは勝軍であった黒田軍の兵士を祀ったものだとされている。

これらのものは現世利益の神として、地元の人々に今も信仰されている。そして、過去においても祟り話などはほとんど聞かれず、御霊的な側面があまり見られない。

一方、関ヶ原の戦いのあった関ケ原町には、名も無き戦死者たちを供養する首塚や胴塚がある。だが、石垣原合戦のあった別府市には、近年、古屋勝馬氏によって石垣原合戦戦死者供養塔が作られるまでなかった。

そして、これらの寺社や供養塔で石垣原合戦の亡霊が出るという話は、管見の及ぶ限り、単発的で個人的である。しかし、別府市の他の場所では、石垣原合戦の亡霊やそれに関連する怪奇現象が起きていると語り継がれているところがある。

３、石垣原合戦の亡霊

石垣原合戦の亡霊やそれに準じたものが出たという有名な場所は、別府市内には３か所ある。七ツ石稲荷神社、旧石垣原古戦場小公園、そして、ルミエールの丘である[(5)]。

これらの場所で、怪異が起きたとされる時代は異なっている。怪異が起きたとされる時代が古いものから見ていきたい。

①　七ツ石稲荷神社　別府市荘園 4548-45

別府市内を東流する境川に並行して走る荘園通りの住宅街の一角に七ツ石稲荷神社は鎮座している。境内には巨石群があり、そこから「七ツ石」の名が付いた。伝承では石垣原合戦の最大の激戦地であったとされ、境内中央の大石の上で、吉弘統幸が最後の力を振り絞って槍をふるったといわれている。

地元に残る話によれば、石垣原合戦の後、この付近の雑木林にある大石の周囲に白狐が現れると噂になり、近くを行き交う人たちが大石を祀り拝むようになったのが、神社のはじまりだとされている。

現在、稲荷を祀る祠に向かって赤い鳥居と幾本もの赤い幟が通りに面して立てられている。温泉施設と滑り台や鉄棒などがある七ツ石公園が併設されている。このような形になったのは、周辺地域の開発によるものであった。

大正 9 年（1920）に観海寺土地会社により「温泉付き分譲別荘」として、観海寺・荘園寺一帯が開発された。当初は松林と雑木林だったところに道路や橋を整備し、植樹が行われ、温泉のある別荘地として位置付けられていった。こうした中、巨石群のあった七ツ石稲荷神社周辺の開発がなされた。昭和 3 年（1928）以降は、国武合名会社が事業を引き継ぎ、その後、昭和 18 年からは泉土地建物の石坂一馬氏が七ツ石稲荷神社周辺を公園に整備し、それが後に荘園町自治会に寄付された。そして、自治会から昭和 46 年（1971）に公園などは別府市へ寄贈された。

こうしたことから大正 9 年にはじまる開発があるまで、長い間、七ツ石稲荷神社周辺は川に面した人の手が入らない土地であったことが分かる。

別荘地が開発されるにともない、七ツ石稲荷神社が整備されている。七ツ石稲荷神社は、隣接する土地に温泉施設などもあることから石垣原合戦の史跡を売り物とした観光地として整えられていったことが想定される。また、吉弘神社が造られたのが、それから 2 年後であり、七ツ石稲荷神社周辺整備が吉弘神社を建立させることに何らかの理由で繋がった可能性もある。

この七ツ石稲荷神社より山手側にも石垣原合戦の亡霊が姿を現したという場所はある。そこが旧石垣原古戦場小公園である。

②　旧石垣原古戦場小公園　別府市荘園

「七ツ石稲荷神社」の西方山手方面に約 500m、「九州大学生体防衛医学研究書附属病院」の南側沿いの住宅街の一角に石垣原古戦場小公園があった。令和 3 年（2021）には、公園は完全に無くなり、更地となっている。

嘗て公園には二つの石碑があった。一つは「石垣原古戦場趾」と刻まれたものである。それには「この地一帯は慶長五年九月、三百七十年前、大分大友、中津黒田軍および木付細川軍との古戦場である。両軍の英魂を弔うために之を建つ 昭和四五年（一九七〇）九月矢野嶺雄書」と記されている。もう一つの碑には吉弘統幸の「辞世の句」と、矢野嶺雄の「石垣原懐古の歌」が刻まれている。その傍には石垣原合戦で死んだ武士の墓、もしくは供養塔とされるものがあった。

このような公園が出来た背景には、石垣原合戦の亡霊に関する騒ぎが大きく影響している。矢野春海が記した「石垣原古戦場小公園の由来と温研所長のことども」によれば、以下のようなことがあったという（矢島嗣久 2007 p99）。

> この小さな公園より通りを隔て、蜿蜒と石垣を巡らした中に広大な自然森と病院があります。昭和六年に建設された「九州帝国大学温泉治療学研究所」略して「温研」と呼ばれていた病院です。現在は九州大学病院先進医療センターという名称ですが、初代の所長は田原淳教授で、この方が敷地内の西半分の原野をそのままに残されたそうですが、第五代の高安慎一博士、この方も立派な方だと聞いていますが、この方が原野を以後も手付かずのままに温存するのに大きな役割を果たしたと言われています。その頃、不思議な事が起きたり、不思議なものが見えたり聞こえたり、また変な事件などもあったようです。このことについてあ

る人が「この地は三百余年前合戦のあった所で、沢山のさむらいがここで討死しており、これは供養するのがよい」と云ったことを聞かれ、武士たちの血が流れたであろう石に「石垣原戦殉節烈士の碑」と書かれ供養していたそうです。高安博士が甘泉とどのような話をされたかは分かりませんが、僧侶である甘泉にその碑を祀ることを託され、ご高齢で昭和四十八年三月に亡くなられました。（後略）

この記録からは、石垣原古戦場小公園周辺で具体的なことはよく分からないが、石垣原合戦の亡霊によると思われた怪異があったという話が広がっていたことが読み取れる。それによって供養碑がつくられ、設置するための公園が生まれた。そして、著者である矢野は昭和6年（1936）に「温研」が作られることにより、原野が開発され、それにより石垣原合戦の亡霊の騒ぎが起きているように感じられていたことが分かる。「温研」の施設は3万坪の敷地があったということから大規模な開発だった。また、この「温研」の誘致にも国武合名会社が関わったといわれている。

そして、「温研」と道を挟んで反対側に出来た石垣原古戦場小公園は「南荘園町」という住宅地の一角に当たっている。この辺りの開発は「温研」が造られた2年後、昭和8年（1938）に行われている。

昭和8年になると国武合名会社が、観海寺・荘園一帯を郊外型高級別荘地として開発を計画し、荘園は「緑ヶ丘」「雲雀丘」「百花村」「鶯谷」と4つのエリアに分け開発した。そして、それぞれの中心付近に共同温泉を設置した。

石垣原古戦場小公園のある「緑ヶ丘」（現・南荘園町）は、同心六角形の放射状街路で構成され、その中央に街のシンボル的な存在の六角形の外観を持つ、緑ヶ丘中央温泉（通称・六角温泉）という共同温泉が建設された。建物は浜脇の大工・田仲亀鶴によって建築され、この共同温泉は地域の社交の場、娯楽の場として位置付けられた。この放射状街路は東京の「田園調布」やパリの「シャルルトゴール広場」をモデルにして開発されたものだといわれている。

このように昭和6年以降の開発により石垣原古戦場小公園周辺は、大規模な開発が進められていった。こうした中、石垣原合戦の亡霊に関する噂が広がり始めていったようである。太平洋戦争の勃発などで、石垣原合戦の戦死者を供養する小公園を作ることはなかなか実現できなかったが、昭和42年（1967）頃に石垣原古戦場小公園として整備された。

ところが、令和の世に入ると諸事情により、この小公園も無くなり、ここに立っていた石碑は七ツ石稲荷神社の境内に地元の人々の手によって移された。こうしたことからも七ツ石稲荷神社と、この公園には深い関りがあるという認識が今もあることが分かる。また、小公園が無くなるにあたり、大きな騒ぎがあったという話がないことからも石垣原合戦の亡霊の存在が忘れ去れていることが伺える。

そして、この「旧石垣原古戦場小公園」から北上したところに現在、心霊スポットだといわれているルミエールの丘がある。

③　ルミエールの丘　別府市鶴見 21

ルミエールの丘は実相寺山に隣接する場所で、かつては加来殿山と呼ばれていた。加来殿山南側にある第一公園内には「黒田如水本陣跡」の石碑がある。石垣原合戦で、黒田軍先遣隊の井上九郎右衛門らが、この地に布陣した場所だといわれている。この辺りは現在、閑静な住宅街になっている。

近年、若者の間やインターネットの中で、落ち武者の亡霊が出るところとして知られている。「首のない落ち武者の霊が出る」「甲冑の音が聞こえる」というものである。また、近隣のゴルフ場では、電気が勝手につく、自動ドアが誰もいないのに開く、打ったボールが返ってくるなどの怪現象が発生するというのである。こうした話は何時頃から出始めたのか定かではない。

例えばインターネットのサイト『OZZY 大分県心霊スポット』には「私が子供の頃に噂になったのは、車で走っていると後ろから落ち武者が追いかけてくるというものでした」とも書かれている [(6)]。サイト運営者は 40 代ということから、30 ～ 40 年前ぐらいには落ち武者の噂がすでに広がっていたのではないかと考えられる。そして、現在、噂話としてインターネット上で広がっている代表的なものが以下のようなものである。

> 大分県別府市の「ルミエールの丘」は、山を開拓してできた高級住宅地ですが心霊スポットとしても有名です。販売開始から 30 年以上が経ちますが、売り出す前から古戦場跡地ということで、よくない噂が流れて、土地が売れなくなり、不動産屋さんが何回か変わっています。
>
> 実際住んでいる人たちも、子供の頃から、不思議な体験をしています。夜寝ていると、ほら貝を吹く音や、大勢の歓声やどよめきが聞こえてきた、という住民が何人もいました。家の中を落ち武者が通り過ぎて行ったり、無言で立っていたりするという声も多く聞かれました。
>
> そういう話が後を絶たないせいか、現在のルミエールの丘は空地だらけになっています。価格も以前の半額以下で販売されています。当初、競合相手の不動産屋さんが、あらぬ噂を流した風評被害で、土地が売れなくなったという話もありましたが、元々古戦場だった為か、住人たちから実際に、武士や落ち武者の目撃情報や戦の音が聞こえる等、多くの声が寄せられているのも事実です。

この話は『奇々怪々怖い話投稿』というサイトに「古戦場跡地につくった「ルミエールの丘」」

というタイトルで、令和４年（2022）１月に載せられている[7]。この話では土地の開発と石垣原合戦の亡霊が関わっているように書かれている。

そこで、今度は加来殿山が開発されてきた歴史を見てみたい。昭和30年代に、この周辺の大規模な開発がはじまった。昭和38年（1963）に藤田観光は別府海を見渡せる観光施設として、別府園ファミリーランドを開園させた。加来殿山にドーナツ型熱帯植物園を造り、話題を集めた。この背景には昭和25年（1950）に別府国際観光温泉文化都市建設法が公布され、翌26年に国際観光道路、通称「やまなみハイウェイ」が着工されたことが関係している。現在、国道500号と呼ばれる、この道路が鉄輪や鶴見などの周辺地域へ与えた影響は大きく、道路沿いを中心に大型のホテルが建設され始め、この道路の完成で別府市の山の手周辺の様相も変わっていったといわれている。

それに応じて、加来殿山やそれに隣接する実相寺山の開発もはじまり、昭和46年（1971）には実相寺球場が竣工した。そして時代は流れ、別府園ファミリーランドは閉園し、加来殿山は1980年代にルミエールの丘として高台の温泉付きの別荘地して開発がはじまる。バブル経済崩壊前後から、その開発と販売は止まっていく。そして、平成になると温泉権付の宅地として再開発がはじまり、今日に至っている。

このような開発と中断、そして再開発が行われた土地・ルミエールの丘を地元に住む人々がどのように見ていたのか分かるような奇譚が、インターネット上で語られている。

小学生の頃、友人たちとルミエールの丘で缶蹴りをしていました。泥棒と警官に分かれ、泥棒を全員捕まえたら勝ちというものです。私は泥棒になって隠れることになり、民家のポストの裏に隠れました。

10分後、民家からお婆さんが出てきて、緑色の画用紙を窓に貼り付けて行きました。意味が分からず、不思議でした。20分後、なかなか友人が見つけに来ないで、スタート地点に戻りました。そこには友人の１人が立っていました。

友人は「やばいことになったぞ。Ｙがいない」というので、私は「隠れているのではないのか」と答えると「いや、Ｙは探すほうだよ」と返事をしました。

私は「じゃあ、まだ探しているのではないか？他のみんなは？」と尋ねると、友人は「みんなでＹを探しているよ」と答え、そこに残りの３名がやってきて、Ｙが見つからないことを各々が言いました。改めて探していると、１人が「なんか気味悪くないか。ここ」と言い出し、「一人でいるのに誰かがいるような気がする」「後ろから付いて来ているような感じがする」などの不安をみんなが訴え始めました。

こうした中、１人が「俺、さっき片足の老人に怒られた。ここは遊び場じゃないって」と言い、みんなが帰りたくなって来た時に雨が降ってきて、「俺らがいなくなったことに気づけば､Ｙも帰るよ」と誰か１人が言い出したことを切っ掛けにＹを除いてみんな帰りました。

次の日、Ｙは休んでいました。その次の日、５人は放課後に先生に呼ばれました。Ｙは全治３か月の怪我をしたというのです。先生は「Ｙ君とこの前、缶蹴りしていたのは、これで全員か？どこでしてたんだ？」と尋ねてきました。私が「ルミエールの丘で」と答えると先生は動揺し、「あそこは私有地もあるので、あまり近づかないように」と、ただ注意をしただけでした。

この話は『本当に怖かった心霊スポット体験談～信じる信じないはあなた次第～』の中の「大分県の心霊スポット「ルミエールの丘」にまつわる怖い話」（2021 年）[8] として紹介されている。これまで見てきたような石垣原合戦の亡霊の話とは異なる。この話の中では、石垣原合戦との関りも書かれていない。

しかし、「ルミエールの丘」が特別な場所として見られていることは分かる。この話の中では、近隣住民からは禁足地的な位置づけがされていた。この投稿を書いた者が子どもの頃に経験した話となっていることやその内容からルミエール丘が開発され始めた頃、もしくは別荘地から住宅地に転化していく時代の話だと想定される。言い換えれば、この頃には石垣原合戦の亡霊の存在が忘れ去られつつあったのではないかと考えられる。

ところが、インターネット上では平成 28 年（2016）頃から石垣原合戦の亡霊に関する噂が再び広がり始めている。平成 28 年には「ルミエールの丘」『全国心霊マップ』[9]、平成 29 年（2017）には「ルミエールの丘」『畏怖　心霊スポット』[10]、令和元年（2019）には「ルミエールの丘」『オカルトオンライン』[11] などで、石垣原合戦の亡霊に関する話が紹介されている。

その背景には、平成 26 年（2014）に黒田如水を主人公とした NHK の大河ドラマ『軍師官兵衛』が１年間に渡って放映されたことが大きいと考えられる。大河にあせて、石垣原合戦所縁の地が注目されていく中、「ルミエールの丘」での石垣原合戦の亡霊騒動が再び起きたのではなかろうか。

４、別府市の開発と、怪異の発生場所の推移

これまでの流れを見ていくと、以下のようなことがいえる。まず、「七ツ石稲荷神社」のある土地は、石垣原合戦の激戦地と知られた場所であった。こうしたことから石垣原合戦の戦死者の霊を稲荷という形で祀る場所になっていったと推測される。当初は集落の中心部から離れた人の手が入りにくい場所であり、白狐が住むという特別な場所、この世と他界との境界という理解が人々にあったと思われる。

ところが、大正時代に入ると別荘地としての開発がはじまり、人々の生活する場所が近づき、石垣原合戦で亡くなった人を供養する場所としての機能は次第に失われていった。その象徴的な出来事が稲荷神社の中に温泉施設などが整備されたことだった。

それにともない地元の人々は新たな場所が求められていった。それが「旧石垣原古戦場小公園」周辺であった。まだ別荘地として大規模な開発も無く、自然も多く残るところであった。昭和に

入ると病院や別荘の開発がはじまる。こうした中、石垣原合戦の亡霊に関する騒ぎが病院周辺で起き、供養碑を求める動きが生まれた。太平洋戦争を挟み、小公園が作られ、供養碑がつくられた。その後も開発の手は止まらず、小公園周辺は住宅地へ変容していった。

そして、地元の人々は新たな場所を求めていった。山の手方面はすでに開発などがあったため、北西部にあった小高い丘、「加来殿山（のちのルミエールの丘）」や実相寺山周辺が注目された。ここはもともと、黒田軍と大友軍の両軍が争った場所でもあり、生と死を分ける境界でもあった。加来殿山周辺で石垣原合戦の亡霊が出るという噂が広がった。ところが、加来殿山も開発が進み、名もルミエールの丘といわれるようになり、次第に特別な場という認識は薄れていく。しかし、バブル経済の崩壊による開発の停滞と、その後の大河ドラマの放映により石垣原合戦の地であったことを人々は思い出すことになる。それにともない、ルミエールの丘周辺が再び特別な場という認識が再び形成され、石垣原合戦の亡霊騒動が再燃したと考えられる。

こうして見てくると、土地の開発にともない人々の生活圏が広がり、それにより人と自然との境界域が変化した。それに応じて、石垣原合戦の亡霊の出現場所も変わってきたことが分かってきた。

宮田登は『妖怪の民俗学』の中で、下記のようなことを述べている（宮田 1990 p166 ～ 167）。怨念を持って死に首だけとなって飛んで行ったといわれる、蘇我入鹿や平将門の首が落ちた場所は、橋や峠といった境界とされる場所であったという。そして、将門の首の落下場所である芝崎村は中世の段階で開発された農村地帯であるとしている。その上で、宮田は「土地を開発してく場合に、自然破壊を前提にするから、自然との対応の仕方でさまざまな障害が生じてくる。江戸の場合、東国に勇名をはせた将門の怨霊が首塚にやどっている。その怨霊を鎮めておけば開発も成功すると考えられたのである」としている。宮田が述べたような、土地の開発にともない、その地所縁の怨念を持って死んだ者を境界に祀るという動きは、別府市の開発においては、石垣原合戦の亡霊をめぐる動きだったといえよう。

では、そもそも近代になって、何故石垣原合戦の亡霊に関する噂がたびたび広がったのか、その背景を考えてみたい。

５、別府市の近代化と人神信仰

別府市は現在の行政区域になるまで、市町村の合併を繰り返してきた[(12)]。現在の別府市の中心となる場所には明治 22 年（1889）に 5 つの村が生まれた。御越村、朝日村、石垣村、別府村、浜脇村である。朝日村は鉄輪などの名の知れた温泉地を持ち、別府村や浜脇村は海に面した、港のある温泉地として栄え始めていた。御越村は漁港として名が知れていた。それに対して、石垣村は江戸時代からあった南立石（立石）村・東山村・南石垣村・北石垣村の四つの村が合併して生まれた村で、他の村に比べて、これといった特徴も知名度の高いものもなかった。

だが、歴史的に見れば、石垣村は九州の関ケ原といわれる「石垣原合戦」の中心ではあった。

こうしたことが地域の象徴的なものとなっていったことは容易に想像できる。石垣村の村長であった帆足蔵太は、のちの大正 4 年（1915）に『石垣原合戦記』を出版している。また、宗像掃部の霊は江戸時代まで御堂の原（現在：別府市堀田）に祀られていたが、明治になると、大友義統本陣跡近くの荒金氏邸宅（南立石本町）に移され、地区のアイデンティティとして位置付けられた。

そして、明治 39 年（1906）に別府町と浜脇町が合併し、大正 13 年（1924）には別府市になり、隣接する漁港のあった御越町も大正 14 年（1925）に亀川町と改称し発展していき、結果的に石垣村は取り残されていく形となる。

石垣村では、この動きに関連するかのように大正 11 年に吉弘神社が誕生した。これは、近代以降、地域所縁の武将などが、自分たちが住む街を造った人物として再評価され、神社が造られたり、銅像が造られたりする全国的な動きの一部だと考えられる [13]。本来、現・別府市をはじめとする大分県では、大友氏がその対象となるはずだが、大友宗麟がキリシタン大名だったことなどが影響し、管見の及ぶ限り、大分県下には宗麟を祀る神社はない。その子どもであり、石垣原合戦における総大将であった義統もキリシタンだったという話もあり、現・別府市をはじめ、県下では祀られていない。その結果、大友の有力家臣であった宗像掃部や吉弘統幸が別府市の象徴として選ばれていったと考えられる。吉弘神社が成立することにより石垣村は、現・別府市における歴史上の地位を高めた。

それを裏付けるように吉弘神社の境内には、のちに同じ別府市になる別府町・御越町・朝日村・石垣村の町長・村長たちの名が奉納者として刻まれている、神社の創建を記念した大正 11 年に造られた石灯籠がある。また、別府を観光地として全国に知らしめた油屋亀八も吉弘神社の拝殿を作る費用として 300 円寄付していた。そして、大正時代に大分県知事を務める田中千里は、明治初年度に切られた松の代わりとして、2 代目の下馬の松を植えた [14]。

その一方、大正 9 年には七ツ石稲荷神社周辺の開発がはじまり、七ツ石稲荷神社は石垣原合戦の死者たちを祀る聖域としての価値を下げていった。それにより名も無き戦死者たちを供養している場所が不明確になっていった。吉弘統幸などの名のある武士たちが近代になって神社が整備されていったのに対して、名も無き戦死者たちが近代になっても行われてこなかったという認識を結果的に顕在化させることに繋がった。それを裏付けるように大正 10（1921）年に出された定村杏三著の『豊後名勝地獄奇観』の「石垣原」には「二百餘人戦没し、大友家の最期を語るの塲である。（中略）土民傳へ云ふ、月闇くらく天陰るの夜は、往々鬼哭瞅々の聲を聞くと」書かれ、

地元の人々には、石垣原の亡霊は成仏していないと考えられていたことが分かる。

室井康成によれば、関ヶ原の戦いでは死んだ名も無き武士たちの霊は、徳川家康の手によって供養され、首塚などが整備されたという話が残されており、近代になって、その塚が再評価され、傍には碑も建てられているという（室井 2015 p171 ～ 176）。しかし、石垣原合戦では、こうした話が残されていない。石垣原合戦にも多くの寺が関わっているが、宝泉寺や実相寺のように戦火で燃えてしまったり、海雲寺のように災害などで移転したりしたこともあり、名も無き戦死者たちが長年絶えることなく、手厚く供養されてきたといえない。そのため、近年になって、石垣原合戦戦死者供養塔が庄屋の末裔によって作られている。言い換えれば、石垣原合戦では多くの戦死者が出たと言いながらも名も無き武士たちの霊は長年供養されてきていないという認識が、別府市の開発とともに多くの人々の中に形成されたと考えられる。

昭和 10 年（1935）になると、別府市に亀川町・朝日村、そして石垣村が合併することになる。石垣原古戦場小公園周辺の開発が始まっていた頃でもあった。これらによって、旧石垣村にこれまでとは異なる環境が生まれてきた。旧住民には、身の回りの開発が進み、外部からのやってくる人たちが急激に増えていき、暮らしていた村の名も無くなるという不安要因が増えていった。こうした中、石垣原合戦の亡霊の噂が広がり始めた。その噂がルミエールの丘へと開発にともない場所を変えながら今日まで続いている。

６、おわりに

これまで見てきたように別府市の開発と石垣原合戦の亡霊には関わりがあった。別府市という街が近代化していく中で、度々生まれてきた不安や郷土への再認識が石垣原合戦の亡霊を生み出してきたといえよう。そして、石垣原合戦の亡霊が出現したとされる場所は開発と非開発の境界域でもあった。亡霊として現れたのは石垣原合戦で死んだ名も無き兵士たちであり、供養を求める霊として側面も見え隠れしていた。人神信仰における怨霊や御霊的な側面を持つものであった。

だが、菅原道真を天神として祀るような、御霊信仰とは大きな違いもある。石垣原合戦の亡霊は個人の人格を持っておらず、ただ石垣原合戦で戦死したという認識で取り扱われている。室井康成は「（前略）祟る塚は、そのほとんどが不特定多数の戦死者の亡骸が一緒くたに埋葬されたと伝えられる点である。（中略）個々の被葬者の人となりを想像することが不可能な集合的記憶媒体として、その塚は存在するのである。その不可解さが、ある種の不気味さを喚起しているのだという仮説は成り立ち得るのではないか」と述べている（室井 2015 p262 ～ 263）。すなわち、室井の見解をふまえると、人格がない、不特定であることが重要となっている。

こうして見てくると、石垣原合戦の亡霊は近代になって広がる英霊の概念に似ている。英霊とは、嘉永 6 年（1853）のペリー来航以降の日本の国内外の事変・戦争等、国事に殉じた軍人、軍属等の戦没者の霊であり、忠魂・忠霊と称されるものである。英霊も個人という枠組みの中では論じられず、戦争で死んだということに焦点を置いた存在であり、石垣原合戦で死んだという共

通項でだけ語られる石垣原合戦の亡霊と類似している。

この英霊は招魂社、のちに全国で見られる護国神社の発展と大きな繋がりがある。大分県に招魂社が造られたのは、大分県県令･森下景端が慰霊顕彰のため、明治 8 年（1875）に松栄山に「招魂社」を創建したのがはじまりである（註 15）。明治 7 年（1874）に佐賀の乱で戦死した杵築の大山昌など 14 柱、同年台湾出兵で戦病死した竹田の井上某など 3 柱、蛤御門の戦いで戦死した南大分荏隈の若杉直綱など 5 柱が英霊として祀られた。

その後、明治 10 年（1877）の西南の役とその前年の熊本神風連の乱で殉職した人たち、297 柱が祀られ、それ以後も日清、日露の役、シベリヤ出兵による戦死者、欧州大戦、満州事変、日中戦争、大東亜戦争などで戦没した方、4 万 4 千余柱が祀られた。祀られる数が増えるにつれ、そこには戦没者という共通概念はあるものの、個人の人格や性格は失われていき、ただ「英霊」として祀られていく。

こうした祭祀のあり方や考え方が近代になって大分県内に広がっていく中、別府市において、郷土でかつて起きた大きな戦い・石垣原合戦での戦死者たちへまで思いが至った時に石垣原合戦の亡霊が生み出されたのではなかろうか。このような考え方が、日本各地で語られる落ち武者の亡霊においても共通して云えるのかは今後の課題としたい。

［註］

（1） 住家正芳によれば、心霊スポットは 1980 年代以降、霊能力者が心霊写真を読み解く手法が発展していく中で、特定の場所に霊の存在を見出すことがなされるようになって生まれたものだとしている。

（2） 別府市教育委員会・別府市文化財保護審議会の『べっぷの文化財№ 44 ―石垣原合戦―』などに基づき、石垣原合戦について記した。

（3） 矢島嗣久の「石垣原合戦の史跡について」及び、著者が現地調査（2022 年 3 月 11 ～ 22 日・6 月 24 日・ほか）した結果による。写真はすべて著者が撮影したもの。

（4） 熊本市内では、北区和泉町の七巻天神や同じく北区龍田町の「天神の火焚き」などで木に藁縄を巻き付ける習俗が行なわれている。福西大輔　2015 「天神信仰の発生と展開―熊本市の事例を中心に―」『西郊民俗』 西郊民俗談話会

（5） 矢島嗣久の「石垣原合戦の史跡について」及び、著者が現地調査した結果（2022 年 5 月 27 日･8 月 26 日･ほか）による。写真はすべて著者が撮影したもの。

（6）「OZZY 大分県心霊スポット」 https://ozzy-oita.com/lumiere/（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（7）「奇々怪々怖い話投稿」 https://kikikaikai.fan/11533（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（8）「本当に怖かった心霊スポット体験談～信じる信じないはあなた次第～」 https://stories-of-scary-spiritspot.com/archives/6662（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（9）「全国心霊マップ」 https://ghostmap.net/spotdetail.php?spotcd=897（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（10）「畏怖　心霊スポット」 https://haunted-place.info/5758.html（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（11）「オカルトオンライン」 https://0ccult.online/ap_27936972/（アクセス　2022 年 9 月 6 日）

（12） 中野幡能・監修　1995 『日本歴史地名大系 45　大分県の地名』 平凡社

※昭和 31 年（1956 年）の日出町の一部・南端村の一部・挾間町の一部・天間村の編入を除く場所とした。

（13） 柳田國男が『明治大正史世相篇』で「明治時代に増加した多くの地方神は、今日の語で言う人格の尊敬を主とし、（中略）祀られたものであった。藩士が別れに臨んで旧君の始祖を社にした（下略）」と言及したのをはじめ、松﨑憲三編『人神信仰の歴史的民俗学的研究』や高野信治『武士神格化の研究』、そして福西大輔『加藤清正公信仰』などで、多くの事例が紹介されている。

（14） 矢島嗣久の「吉弘神社の歴史」及び著者が現地調査（2022 年 3 月 11 日・8 月 24 日）した結果による。

（15） 著者による現地調査（2022 年 2 月 23 日）の結果による。

参考文献

小松和彦　2006 『神になった人びと』 光文社

定村杏三　1921 『豊後名勝地獄奇観』 甜梅書院

住家正芳　2014 「心霊写真とパワースポット」民俗学事典編集委員会編『民俗学事典』 丸善出版

高野信治　2018 『武士神格化の研究』 吉川弘文館

中野幡能・監修　1995 『日本歴史地名大系 45　大分県の地名』 平凡社

福西大輔　2012 『加藤清正公信仰』 岩田書院

福西大輔　2015 「天神信仰の発生と展開　―熊本市の事例を中心に―」『西郊民俗　231』 西郊民俗談話会

別府市教育委員会・別府市文化財保護審議会　2014 『べっぷの文化財№.44―石垣原合戦－』 別府市教育委員会

松﨑憲三編　2014 『人神信仰の歴史的民俗学的研究』 岩田書院

宮田登　1990 『妖怪の民俗学』 岩波書店

室井康成　2015 『首塚・胴塚・千人塚』 洋泉社

矢島嗣久　2007 「石垣原合戦の史跡について」『別府史談　20』 別府史談会

矢島嗣久　2012 「吉弘神社の歴史」『別府史談　25』 別府史談会

柳田國男　1990 「人を神に祀る習俗」『柳田國男全集　13』 筑摩書房

1990 「明治大正史世相篇」『柳田國男全集　26』 筑摩書房

矢野春海　2007 「石垣原古戦場小公園の由来と温研所長のことども」『別府史談　20』 別府史談会